

方剂名	効能	生薬組成
書籍	主治および証	病機 方意
<b>治風剂 疏散外風剂 8</b>		
<p>せんきゆうちやちようさん 川芎茶調散</p> <p>和剂局方</p>	<p>祛風止痛</p> <p>&lt;主治&gt; 頭風 頭痛、偏頭痛が反復して長期間治癒せず、感冒や情緒変動などによって誘発される。</p> <p>&lt;病機&gt; 風邪が厥陰肝に深伏して疏泄を阻滞するために肝陽が擾動され易くなり、外邪の侵襲や情緒変動により風邪が引き動かされると、風陽が誘発されて上擾するので、反復しつつ長期にわたって頭痛が発生する病態であり、「頭風」と称する。 初期には外感風邪として発症するが、風は肝気と同気相通で、風邪は肝に侵入しやすいために、厥陰肝に深入して伏在するようになり、慢性化し反復して治癒し難くなる。外邪によって誘発された場合には、悪寒、発熱、脈が浮などの表証がみられる。</p> <p>&lt;方意&gt; 祛風すると同時に、肝の疏泄を条達させる必要がある。</p> <p>祛風の荊芥・白芷・羌活・防風・薄荷で風邪を除き、香附子・川芎で肝の疏泄を<sup>じょうしょう</sup>舒暢し、甘草で諸薬を調和する。羌活・防風・荊芥は太陽頭痛（後頭～項部）を、白芷・薄荷は陽明頭痛（前額部）を、香附子・川芎は少陽、厥陰頭痛（側頭、頭頂部）を、それぞれ改善して頭痛全般に有効である。また、川芎は血中の気薬で肝血に入って祛風すると共に、他の風薬の助けにより肝気の条達を強めるので、本方では主薬になっている。細茶で服用するのは、苦寒の茶葉で頭目を清し、風薬の温燥昇散を抑制する目的である。全体で疏肝、祛風止痛の効能が得られ、厥陰に伏在した風邪を除き、頭風を改善する。</p> <p>&lt;参考&gt; 肝は蔵血の臓であり、慢性化すると肝の陰血が消耗するので、当帰・白芍・何首烏・生地黄などを加えて養血滋陰、熄風することも必要である。</p> <p>日本での保険適応効能、効果 風邪、血の道症、頭痛</p>	<p>香附子・川芎・荊芥各6g・白芷・羌活・甘草各3g・防風2g・薄荷12g 粉末にし1回6gずつを細茶で服用する。水煎し服用してもよい。</p>
<p>きつちやちようさん 菊花茶調散</p> <p>医方集解</p>	<p>疏風止痛</p> <p>主治は、頭風 川芎茶調散は、温に偏し風寒に適するのに対し、本方（菊花茶調散）は、川芎茶調散に疏散風熱の菊花・白僵蚕を配合することにより風熱に偏する場合に適する。</p>	<p>川芎茶調散 + （菊花・白僵蚕各6g） 細末にし、1回6gを服用する。</p>
<p>せいじょうけんつうとう 清上蠲痛湯</p> <p>寿世保元</p>	<p>祛風止痛</p> <p>主治は、頭風。 川芎・当帰は肝の疏泄を舒暢し、羌活・防風・蔓荊子・細辛・白芷・独活・菊花は祛風止痛して、肝気の条達を助ける。蒼朮は脾運を助け、麦門冬は風薬の燥性を緩和し、黄芩は温性を緩和し、生甘草は諸薬を調和する。 本方（清上蠲痛湯）は、川芎茶調散と方意はほぼ同じで、止痛の効能が強められている。 原文には「一切の頭痛の主方、左右偏正を問わず、新久みな効す」とある。</p>	<p>当帰・川芎・白芷各3g・細辛1g・羌活・防風各3g・菊花・蔓荊子各1.5g・蒼朮・麦門冬・独活各3g・生甘草1g・黄芩4.5g 生姜と水煎し服用する。</p>
<p>りっこうさん 立効散</p> <p>蘭室秘蔵</p>	<p>祛風止痛</p> <p>主治は、風勝の歯痛、頭痛、項背痛など。 祛風止痛の細辛・防風・升麻と、熄風止痛の竜胆草および調和諸薬の甘草からなる。温性の細辛・防風と、寒涼の升麻・竜胆草の配合により平性の祛風止痛剤になっている。なお、細辛には局所麻酔効果もあるので、口中に含んで歯痛部に留めると止痛の効果が強まる。突発して増減する風勝の疼痛に適し、表証を伴う場合に特によい。 日本での保険適応効能、効果 抜歯後の疼痛、歯痛</p>	<p>細辛2g・炙甘草1.5g・升麻・防風・竜胆草各2g 水煎し、口中に含んで痛所に留めた後服用する。</p>